

[003]史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2344448>

出版情報 : 史淵. 3, 1931-12-28. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン :
権利関係 :

彙報

九大史學會本年度第一回例會

昭和六年四月廿五日、第二學生集會所に於て開く。大會の日時を變更して、例會を先きに開くことにした。長教授開會の辭を述べられ、續いて左記の講演に移つた。

一、大戦責任問題に於ける獨乙史界の努力 大村助教

世界大戦が終るや、ヴェルサイユ條約は其の第二三一條に於て大戦の責任者を獨乙及其の同盟國なりと規定した。而して、之は購和條約締結の基礎となつたのであつた。然し乍ら此の第二三一條は眞なりや。賠償金の支拂は戰敗因としてであり、決して道徳的に大戦の責任國としてでないといふのである。此處に於て獨乙學者は、其の真相を究明し二三一條の修正を試みんと努めたのである。彼等を修正派といふ。彼等の努力は、國內及國外の外交文書の出版及之による、研究の發表であつた。カウツキー文書集を初め、獨乙外務省外交文書集、白耳義文書集露西亞のイスホルスキー文書集、ジーベルト文書集が出、研究として「エー・グランデンブルグの「ビスマルクより世界大戦まで」を初めとし、全史學者が、之に關し筆をとつた。大戦問題に關する研究のみを掲載する雜誌「Berliner Monatsheft」が一九二三年以來發刊せられることとなつた。かくて、此等努力の

結果、第二三一條は或程度の修正を見るに至つた。即、從來最も責任少しと云はれた英國を初め、佛國、露國にも各々大戦の責任はあるといふことが明かにされたのである。尙此の問題は今後更に、新史料の發見と共に究明せられる所多々あるであらう。

二、支那に於ける人皮剝削の奇習について 重松教授

人皮剝削の習慣は古くからその例なきに非ざるも、是が罪人所刑の爲に實際に行はれるのは元の時代に至つてからある。

阿哈馬は元の世祖忽必烈に仕へ、官規を紊亂して人民怨恨の的となり山東で暗殺された。後、生前の罪愆々明白なるに及んで一旦埋葬の棺を掘返され、屍は禽獸の餌に供されたがその時棺中より兩耳ある人皮が發見された。世祖を呪詛して剝削の刑を受けた罪人の皮であると家人は語つた。

建文帝の遺臣景清は永樂帝を恨み、事を企てんとし捕へられ皮を剝がれた。

武宗の時代に至ると剝削の例は更に多くなる。正徳七年には剝皮を以て鞍を作つたと云はれ、親を殺して捕へられて剝がれたもの、召使の主人に従はざりしを以て剝がれたものなど、國家の手による所刑のみならず個人的な所謂私刑の例までも見られる。

明末になつても是等の例は依然として多い。宦官魏忠賢が剃いたこと、湯克寬が海賊を伐つてその頭目の皮を剥いたこと、張獻忠が専門の皮工を雇つたこと、などそれである。

清の頃になつても、明末福王の寵臣馬士英が剥かれ又、乾隆帝の臣、和坤が弾劾されて自殺した時にも其没収された家財中から人皮が発見されたと云はれてゐる。

連断の誇りを免れないかも知れないが、右に見られた様なかゝる残忍なる風習は恐らく西域との交通の結果もたらされたものであらう。

次に剥削の方法であるがその手續は極く簡單であつたらしく記されてゐる。瘦男が最も手輕であり、最も困難なるは肥へた婦人就中その乳房の邊りであつたと云はれる。

皮場崩なる語が元來人皮を剥ぐ爲の場所を表はしたものとすゝるならば、剥削は恐らく元時代以前からあつたものであらう。何れにするも人皮剥削といふが如き慘酷なる刑罰が支那の近世に於て、公然國家の手によつて行はれたことは、刑史上注目しに値するものであると云ふべきであらう。」

約一時間休憩の後晚餐會に移る。講演會には見へなかつた方々も集られた。長教授開會の挨拶を述べられる。會食、終つて、所謂座談的研究發表があつた。

- 一、ジャヌダルクの史料について 長 教授
- 一、狛近眞著教訓抄と中世藝術思想 伊奈 助手

一、新しく發見した貨幣について 橋詰武生氏
一、武藏野の古墳 高柴金一郎氏

かくて八時過ぎ盛會裡に散會した。(伊奈、山本健)

九大史學會第三回大會

六月二十一日開催。例年の通り午前中は展覽會、午後は講演會、夜は晚餐會が催された。以下概況を略記する。

(一) 展覽會

本年は香椎宮神苑内の同宮社務所に於て開く。同宮所藏の寶物及古記録を始め、武内、三笠、木下、御田等舊神官及社家所藏の古文書を陳列した。永祿元文の交に於ける西南諸大名と香椎宮との關係文書多く、其の他社領に於ける徳政、益買關係等の私文書もあつた。古器物としては沖島出土の磐固所瓦等もあつた。雨天に拘らず參觀者多數あり、頗る盛會であつた。

(二) 講演會

午后一時より九大工學部本館大講堂に於て開催せられた。先づ本年度當番委員長沼教授の挨拶に始まり、續いて本學二教授の左記の如き講演があり、滿堂の來會者は多大の感激を與へられた。四時半閉會、今其概略を摘記する。

一、古文書と假名

春日 教授

わが假名が五十音圖又はいろは歌に整へられる迄には長い年月を要した。文献によつてその發達を伺ふに、假名の母體とも云はるべき漢字が、事實我國に使用された時代は正史記載の漢

宇渡來の時期よりも早つたらしい事は、志賀島出土の金印によつても想像される。伊豫温湯湯碑(推古四年)や、法隆寺金堂觀世

音菩薩の光背銘(推古十四年)等は又漢字使用の古い例である。

外人によつて書かれたらしい漢文様式の是等の文獻は、時代の経過と共に次第に和化される。萬葉などの歌謠に見るも古い方は漢文様式に、新しい方は國語様式に近い。假名の使用はこの間に起り最初は固有名詞の表現に、次で和化された漢文に無意識的に用ひられた。古事記に於ては意識的に使はれて居り、大體奈良朝には、助辭を假名で書く宜命書、一字一音の假名書、又その中間のもの等が見られ、眞假名の使用は一般化された觀がある。

略體(片假名)草體(平假名)は共に漢字の煩雜を厭つて單化せんとする所より生れ、終には意義を離れ符號として用ひられた。かくて形はくづれたが字は統一されて來た。

假名は、その發生、生長の初期にあつては概略右の様であつたが、一方漢文は普通文に於て、又文學物に於て、尙ほ支配的であり、假名は勢ひ其の發達を殺がるべき情態にあつた。にも拘らず假名が能く其生長を持續して行つたのは抑々如何なる理由に依るか。

漢籍、佛典の傍訓の記入即ち之である。本文の傍に聽きつゝ、書入れる爲には字形小にして字劃少きことが必要である。直接假名の發達を促したものは實にこの要求であつたと思はれる。

次に來る傍訓に於る假名の發達については他日に譲ることゝ

する。

二、日本布教以前の耶蘇會に就いて 長 教 授

日本布教以前の耶蘇會の内容を 一、道德 二、布教(論理) 三、政治の三項目に分つて述べるが、非難の方面より之を見る際甚だ興味を引く事實がある。乃ち猶太人非難排斥と之とが並行してある一事である。

一、道德に就いて見るに、目的は方法を神聖にすとの主張があつた。之に關して諸種の非難が後世(十九世紀中頃)獨乙に於て特に激しかつた。而して猶太人迫害の獨乙に甚しかつた時は一八七〇年頃であつた。さて右の耶蘇會の主張を由來する所から見ると、煩鎖哲學に於けるアクイヌスの人間行爲意識論の影響とする説がある。トリエント會議の「善行天幸」、渡米以前の耶蘇會の善行例へばザベリヨのゴア生活、「凡てを凡てに」とロヨラが云つた如きから見ても、殊にザベリヨその人によつて東洋方面に傳へられんとする耶蘇會の道德に就いて非難することは必しも當を得ぬと思ふ。

二、布教の論理から見ると兩意的言葉を以てすることが示されてある。一五四一年アイルランド在のサルメロンへのロヨラ書翰が之を語つてある。詭辯を用ひて相手に虚を與へず外見は冥想的にして奥深かき感を催させるやうとの注意がなしてあつた。然しながらこの事は當時の哲學の蓋然論に感化されることの多かつたがためと解すべきであらう。眞を主張せずワールシヤインを説いたのである。

三、政治の側から最後に見ると、一五三一年パウル三世教書にミリタンテイスの語があり、亦耶蘇會紋章の一つの解釋から一般に戰鬪的攻略的と見做されてゐる。そも、耶蘇會は一五四四年巴里モンマルトン聖ピエール寺院の會合に起因するものであるが、宗教改革に對する反抗運動なるものではない。唯だ法王が之を利用するに至つたものであり、紋章の新しき解釋によつてもその本來の政治的性質を從來の如く説くべきではなからう。殊にザハリヨの人格に依つても日本渡來以前の耶蘇會の性質を知るを得よう。

終りに日本に於ける耶蘇會の研究は従前甚だ不滿なるものであつたが、眼界を擴げて之を見ることは研究の上に新路を與へるものであり緊要のことに思ふ。

(三) 晩餐會

午後五時半より工學部本館地下食堂に於て開催。食后武谷水城氏、戸上駒之助氏、安田善代門氏の三氏を始め會員諸氏の興味ある研究或は所感の發表があり學的興奮の一日を清算しながら和氣霽々裡に七時半本大會の幕を閉じた。

雨天であつたに拘らず多數の御來會を得たことは會員諸氏の熱誠を物語ると共に本大會の前途を祝福するに十分である。併し本大會も未だ生れて三ヶ年、會員諸氏の愛撫を要すること尙ほ大である。茲に不斷の疵譴を垂れ給はんことを特に切望懇願して置く。

終りに本大會のために會場を御提供下さつた香椎宮に對し、又御秘藏の貴重なる史料の陳列を快く御承諾下さつた出品者各位に對し厚く感謝の意を表する。(伊奈、國行、益田、山本健)

○和六年度史學科卒業論文題目

國史學專攻

近世宿驛考

大伴家持の思想について

西洋史學專攻

主としてタアフエ内閣時代に於ける奥國內獨逸旅運

動に就いて

十九世紀佛蘭西史學の興隆(序説)

東洋史學專攻

桓寬鹽鐵論の一考察

○和六年度史學關係講義題目

國史

反本地無跡神道

國史演習(吾妻鏡)

室町時代の世相

國史演習

近世日本思想史

國史演習(榮華物語)

東洋史

唐宋時代史

安河内 隆
山本 健 二

小林 榮 三郎
益 田 健 次

青 野 喜 助

長 沼 教 授

長 沼 教 授

長 沼 教 授

竹 岡 教 授

竹 岡 教 授

竹 岡 教 授

重 松 教 授

梁啓超、中國三百年學術史(演習) 重松教授
西洋史

X. Rainville: Histoire de Trois Generations (演習) 長 教授

Heigel: Politische Hauptstroemungen in 19 Jahr
hundert (演習) 長 教授

最近歐州國際外交史(一八七一——一九一四)

大村助教授

Groebe: Weltgeschichte im Grundriss. (演習)

大村助教授

史學概論

Einleitung in die Geschichtswissenschaft

長 教授

其他

日本法制史

金田助教授

日本宗教史特講

原田講師

日本佛教史

花山講師

支那文學

山内講師

先秦哲學史

楠本教授

支那哲學史演習

楠本教授

印度哲學史

干湯教授

印度哲學史

小野島助教授

西洋哲學史(古代及中世)

鹿子木教授

西洋中世紀哲學史

鹿子木教授

西洋近世哲學史

中島教授

西洋哲學史(演習)

中島教授

古代國文學史概論

春日教授

竹取物語(演習)

春日教授

萬葉集(演習)

春日教授

近世國文學后景論

小島助教授

近世の小説

小島助教授

日本における英文學紹介研究の歴史

豐田教授

英文學史(Victorian age)

豐田教授

産業革命史

三田村教授

政治史概論

淺野助教授

經濟學史

波多野助教授

十八世紀佛文學史

成瀬教授

十七世紀佛文學史

須川助教授

佛文學史概説

須川助教授

國 史 例 會

(第八回例會)

十二月三日(水)午后六時より於第二學生集會所五號室第四回例會を開く。長沼、竹岡兩教授及伊奈助手出席

一、國號の胎生とその史的發展

都築頼助君

一、條里の研究

鏡山 猛君

都築氏は我が國號の種々相を記紀等の古代文獻に求められ、尙

本居宣長の解釋等を引用されて言語學的に又廣く文化史的に説明され、鏡山氏は筑紫那席田村の條里遺跡を實地に就いて研究された結果を發表され特にその水城との關係等有益な發表をなされ、終つて長沼教授並に竹岡教授の批評指導を受け九時すぎ散會。

(第九回例會)

一月二十八日(水)午后五時より於五號室第五回例會を開く。竹岡教授事故の爲欠席今日は伊奈助手の研究を發表して貰ふことにした、報告題目は左の通りである。

一、本邦社寺の微利認容の根據について 伊奈健次君

かくて同助手は比較經濟學的方法を以て深く中世社寺金融を究められ、更に遡つて奈良朝時代との關係にまで論及せられ、終つて長沼教授の御講評あつて散會。

(第十回例會)

二月七日午后三時より於五號室第十回例會を開く。この日長沼教授事故の爲欠席、今回は今年卒業の安河内、山本の兩先輩の卒業論文の概要及苦心談について聞かせて貰ふことにした

一、近世宿驛考 安河内隆君

一、家持の思想に就いて 山本健二君

後で竹岡教授の懇篤な御批評を賜はり終つて新三浦にて送別の宴をほり、いとも盛大に本年度の例會を閉じた。

(第十一回例會)

五月十六日第十一回例會のつもりで工科食堂にて本年度新入

生の歡迎會を開く。長沼竹岡兩教授並に國史專攻生一同出席一同元氣に溢れて希望理想をのべ國史研究の學徒としての抱負を談じ最後にその一ヶ一ヶについて長沼教授は懇篤極る批評を賜はりなごやかな裡にも輕い緊張を覺へて會は運ばれた。

(第十二回例會)

六月四日第十二回例會を於五號室開く。長沼竹岡兩教授伊奈助手山本副手出席研究報告は次の通りである。

一、竹取物語について

都築頼助君

一、條坊の研究

鏡山 猛君

都築氏は竹取物語を史學の對象としてその内容について文化史的解剖を試られ鏡山氏は先回の條里の研究に引續く太宰府條坊の制の研究を發表された。

國史學生讀書會

二學期も尙萬葉研究を引つぎ行ふ事にする。

十二月十日午后三時學生集會所五號室にて開催今日は主に卷二の高市皇子を讀んだ。

十二月十五日前同同様五號室に於て萬葉集五山上憶良の貧窮問答歌を中心に憶良の歌を讀んだ。

一月三十一日今日よりテキストを吾妻鏡に變更讀む事を中心

に研究を續ける事にしたこの日五號室にて開催。

二月十四日、午后三時六號室にて開催。
二月二十一日五號室にて開催、吾妻鏡は次年度一學期長沼教

授の演習に用ひられる事になつた。かくして昭和六年度は會員多數の爲に各學年毎に分れて讀書會を繼續した。三年生は法王帝説、二年生は古文書讀解の研究、一年生は神皇正統記と決定毎週各組適宜に研磨をほげむ。

六月廿六日讀書會合評會を於五號室開催。各學年毎に大略の報告ありて左の紹介ありて散會。

- 一、本藥師寺塔婆に關する疑問
- 一、藥師寺東塔擦銘の一解釋

之は考古學雜誌廿卷足之康氏論文紹介者は山本嘉藏君

- 一、日本貨幣流通史

小葉田淳著

之は伊奈助手の新刊紹介、之にて夏休を迎へる事にする。

西洋史研究會

昭和六年五月五日、新入専攻生歡迎研究會

Persistent Problems of Church and State (A. H. R.,

Vol. xxxvi No. 2, Jan. 1921) Evans B. Gr. one の紹介

清水 知人

'Kansas-Nebraska Act (1854)'—Missouri Compromise (1820) 廢止に就いて 太田 等

昭和六年五月廿六日、研究會

The Political Reactions of Banquart's Eastern Expedition By J. Ho land Kase (E. H. R. Vol. XLIV,

1929) の紹介

岡野 平吉

Franz Sae: Remarques sur la methode en Hist. economique et sociale. (Revue 54, 161, 1929) の紹介 讀井 鐵男

昭和六年六月廿日、研究會

- I. Liess, Englische Geschichte: Der Kampf um die Wahlform (1815—182) の紹介 須藤 章
- Jean Maurain, Le Clerge et le plebscite du 20 dec 1851 の紹介 益田 健次

Moritz Ritter, Die Entwicklung per Geschichtswissenschaft. Berl. 1919. ss. 311—332 の紹介 小林榮三郎

昭和六年夏期研究會(七月廿二日以降毎水曜日)

G. P. Gooch, History of our time 1885—1913

の研究講讀

(尙西洋史研究會記錄第四號は近々印刷配布の豫定)

九大支那學研究會

本會は昭和四年五月の成立にして九法文學部、東洋史、支那文學及び支那哲學擔任の教授を中心とし、卒業生及専攻の學生等相集つて研究を續けて來た。本年は其の第二年目である。卒業生が多くなるにつれて、盛んになるだらうと思つて、皆努力してゐる。本年度の研究會合は左の通りであつた。

三月十日(火曜)重松教授に引卒せられ會員有志の遠足會を

行ひ太宰府觀世音寺方面の史蹟を踏査す。參加者學生遠藤、岡宮、青野、井邊、井上の諸君。

三月十二日(木曜)午後一時、第二演習室にて例會開催、出席者重松教授、楠本教授、山内講師及專攻學生等。

『元曲梧桐雨雜劇に就いて』

學生 岡宮保美君

『鹽鐵論の一考察』

學生 青野喜助君

六月八日(月曜)午後一時。支那學研究室にて例會開催。出席者重松教授、楠本教授、國行助手、遠藤副手及大學院學生、專攻學生等。

『支那史上の紅巾軍に就いて』

重松 教授

(井上)